

小学部の研究

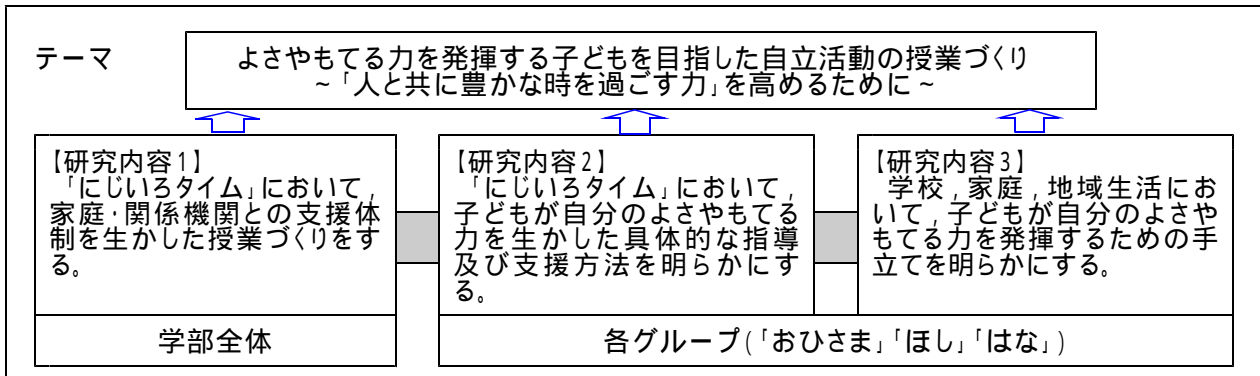
よさやもてる力を発揮する子どもを目指した自立活動の授業づくり  
 - 「人と共に豊かな時を過ごす力」を高めるために -

提案者 佐藤 美由紀 高尾 政代

1 学部研究テーマ設定について(紀要pp. 25 - 28)

小学部では前次研究の課題や個別の指導計画を活用した授業づくりの課題，子どもたちのニーズなどを踏まえて，社会性にアプローチをした自立活動の時間における指導の取組(「にじいるタイム」)を，実践を通して研究することにした。

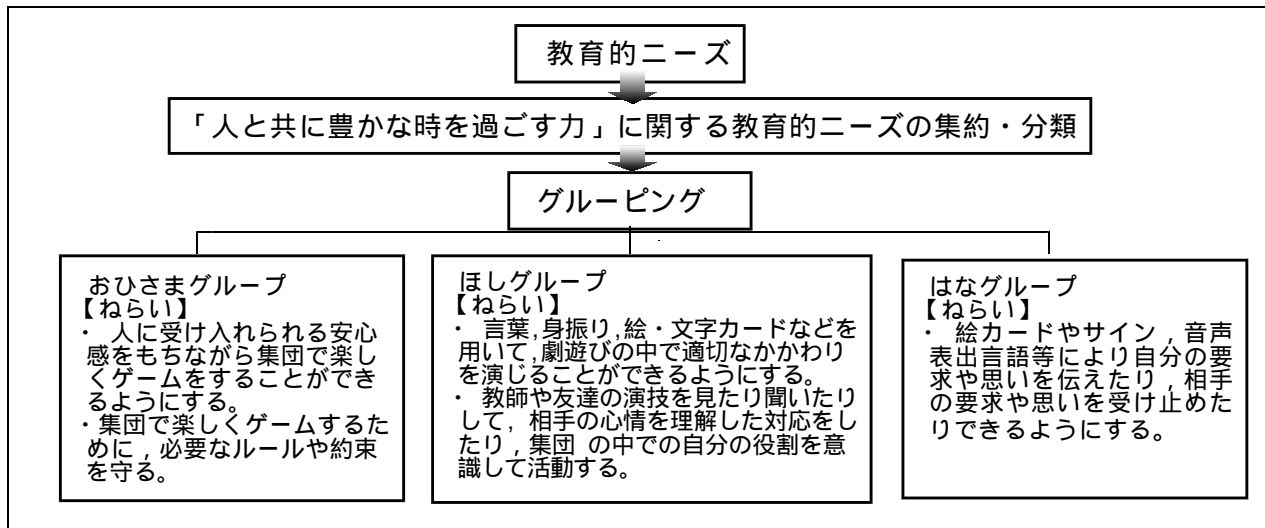
2 研究内容と方法(紀要pp. 28 - 29)



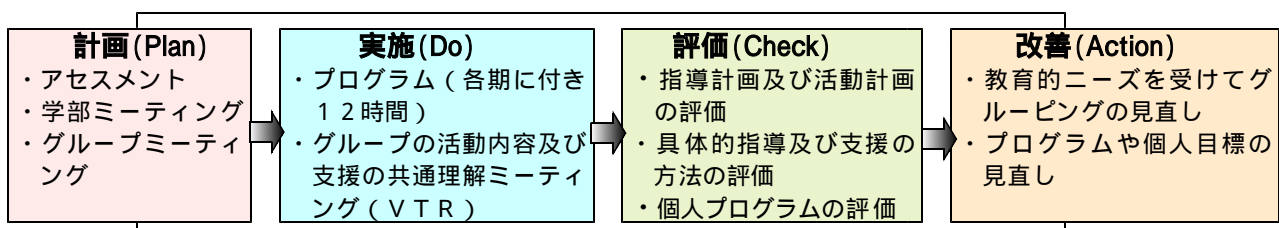
3 実際 (紀要pp. 29 - 54)

研究内容1

- 「にじいるタイム」の設定に当たって  
 集団へのアプローチが有効な教育的ニーズに対する計画的，継続的な指導ができる！  
 家庭や地域生活に十分に応用するための授業づくりをしたい！
- にじいるタイム授業づくりの基本的な考え方  
 授業づくりの視点



授業づくりのサイクル



## 研究内容2・研究内容3

- 研究内容2・3については三つのグループ（おひさま・ほし・はな）を編成し、各グループの実践の中で明らかにした。

### (1) おひさまグループの実践（紀要pp.34 - 40）

本グループの子どもたちは、友達と一緒に活動したい、楽しく遊びたいという思いはあるものの、自分の気持ちに添わないと相手に向かう、集団活動から離れて自分の好きな活動をする、場のルールを守って活動することが難しいなど、集団活動場面において苦戦している姿が見られる。子どもたちの教育的ニーズを見てみると、「ルールや約束事を守って活動する」「集団の中で活動する」の二つに集約できる。そこでおひさまグループでは、活動の中心に集団ゲームを据えて取り組むことにした。活動のねらいとして、「人に受け入れられる安心感をもちながら、集団で楽しくゲームをする」「集団で楽しくゲームをするために、必要なルールや約束を守る」の2点を設定した。これまで、絵カード合わせゲームやビンゴゲーム、いす取りゲームなどの集団ゲームに取り組み、その中で、一人一人の子どもが、集団活動場面において、よさやもてる力を発揮するための有効な手立てを探ってきた。その結果、文字や絵を用いた視覚的な提示、トークンエコノミー、ソーシャルストーリー™、守れているときに随時称賛するなど、一人一人の子どもに応じた手立てが明らかになってきた。さらに、応用場面（他の学校生活場面や家庭）を設定し、にじいるタイムで有効であった手立てが日常生活場面でも有効かどうかの検証も行った。

### (2) ほしグループの実践（紀要pp.41 - 47）

本グループの子どもたちは、様々な言葉を持っているものの適切な場面で十分使いきれていないという課題があり、その教育的ニーズは「相手の気持ちを受け入れたり、自分の思いや気持ちを伝えたりしながら、友達と仲良く過ごすことができる」である。今回、このような子どもたちに対して、校内での日常的な場面を意図的に取り上げて、学習の中でロールプレイを通して活動してきた。その中で、ビデオモデリングや写真カードなどを用いて、様々な場面で表現できるようにしてきた。また、やり取り場面では、子どもが考えて表現できるように言葉掛けを減らして待つこともした。そうすることで、一人一人の子どもの自発的な言葉の表出を促す働き掛けが見えてきた。例えば、最初に「ねえ、ねえ」というフレーズを使うことで、「かして」「あそぼう」などの言葉が表出しやすくなったことなどである。これらのことは、プログラム期以降、日常的な応用場面においても見られるようになってきた。このような成果の背景として、保護者に授業参加してもらって手立てを共有したり、子どもの変容についてアンケートを通して保護者と共に評価したりしたことがあげられる。以上のように、教師だけではなく、保護者と協働しながら手立て等を共有することは、とても有効だったと言える。

### (3) はなグループの実践（紀要pp.48 - 54）

本グループの子どもたちは、音声表出言語が十分獲得されておらず、日常生活の様々な場でコミュニケーションの学習をしている子どもたちである。それぞれが、身振りや指さし、写真カードなどによる意思の相互伝達機能の獲得を目指しており、音声表出言語でのやり取りや相手の要求や思いを受け止めるなどの教育的ニーズも挙がっている。日常場面では、身近な大人には何らかの方法で伝えようとする姿が見られるため、一人一人のよさやもてる力を生かして自分の要求や思いを伝えるための活動を設定した。活動の際には、音声、写真カードなどを使い、子どもの持てる力によって指導の仕方を変え、必要に応じて身体ガイダンス、モデリング、指さし等の支援を行った。期では、子ども同士でお店屋さんごっこを行うことで、身近な人（友達）を意識し、自分の要求や思いを伝えたり相手の要求を受け止めたりするようにした。また、期では、伝える相手を広げ、教室外にお遣いに行く活動を行った。

このような活動を行う中で、子どもたちは自分なりのコミュニケーションスキルを獲得しつつある。子どもにとって不得意な分野であるにもかかわらず、楽しみながら活動することができたことは、子どもたちが豊かな時間を過ごしていた証なのではないかと考える。

## 4 まとめと今後の課題（紀要pp.55 - 56）

自立活動の時間における指導として「にじいるタイム」を設定し、課題であった「コミュニケーション」や「社会性・集団参加」の領域に直接アプローチすることができた。

学部ミーティングや授業ミーティングにおける情報交換により、全職員で有効な手立てを共有することができた。今後は簡便なミーティングや情報交換の時間設定を検討する。

一人一人に有効な手立てを支援関係者と共有する状況を作ることはできた。今後は教師の働き掛けについては、保護者参加の授業を継続して行ったり、必要に応じて家庭や関係機関に出向いて実際に支援をする機会を設けたりするなどの取組をする。